

# 生 奠

第 四 卷 一 月 號

□ 今日多くの人々の中に宗教と稱せられる種々の宗教がある。乍然之等の宗教は果して悉くが眞實の宗教であらうか。

□ 尤も宗教そのもの發生は人類各自の満足を自己の本心に與ふんとするところから起つた限り、人類各自の本心が宇宙の本心に歸一するところ、そこに眞實の宗教はある。

□ 乍然人類の進歩發達は其時處位によつて千差萬別である限り、其信する所の宗教も亦各自異なるといふことは之今日の有様である。

□ 從て其の人の宗教は各人各異の宗教であつて決して他の人の宗教と全々同一であるとはいへない。

□ 乍然人類の進歩社會の發達は人類の向上止まざる限り無窮に進展し行くものなれば之に伴ふ人類の宗教も亦自ら進歩發達して止まないものであらねばならぬ。

□ 從てそこには日夜に進展して止まない人類の向上が各自の求むる信仰の内容に向つて常に充實せられて來なければならぬ。而てそこに眞實の宗教がある。

□ 乍然之等の進歩は果してどこまで進むであらうか。宗教は單なる人生の娛樂機關ではなく、又、のまでも小供のやうな歌をみ歌ふて楽しむ宗教でもありえない。

□ そこには永遠の生命と無限の向上とが如來を中心と爲て眞實に輝く生活であらねばならぬ。人格なき人の宗教はそれは一つの迷信である。(念)

大正十四年一月二十五日印刷 本大正十四年一月二十五日印刷

▼皆さまお芽出度う御座います、お正月が参りました。  
 ▼一生に四十度か五十度しか来ぬお正月だからお芽出度い筈です。これ「芽出度くもなし」なんと云ふ人間は鈍か死ぬてゐるか、二つの中の一つです。而しお正月そのものは幾つ来る事か知れぬものを、我々は五十遍か七十遍しか味つて行けぬとする心細い次第です、それがお正月をお芽出度くする原因かと思ふと寧ろ悲愴な氣がします。  
 ▼我々は無窮の時間の中であるか、一部分しか占めず、其間の方に朽折れて生滅するのかと思ふと不甲斐なく思ふと本當に蛆蟲のやうな人生です。そんな奴等が「文化」「人生」だと呼んで居ても、大局から見れば蛆蟲の人生が大事件、それが内にとつて極大事である。我々は此れ取ては人間の人生を究めればそれで十分、それが内にとつて極大事である。我々は此れつぼけた窮身に無限の過去を含めて味ふ事、それが内にとつて極大事である。我々は此れに壓縮して見る、そして過去永遠、價値、存在を此刹那に發見する。現在もなく悉くが過去と未來とである、過去と未來も無く唯、現在のみである。現在とすするものも無き本來の一實相である、此實相に至つては唯、佛如である。我々は大きな軀も金色の界があるのみである。  
 ▼我々は強ちに百も二百もの正月の上にはびこらねばならぬ必要を認めぬ、一寸時にも此限を味ふ事が出来る、それが無量壽であり、佛如である。我々は大きな軀も金色の軀もいらぬ、又大きな宮殿も莊嚴の妙土も要らぬ、此現實が如來の眞實無量光明土である。  
 ▼爰に至て五尺の人間の小人も總てを包む極大生である。「大小」なんてケチな粹を多した如來生である、お正月の芽出度さは實に此裡に在る。豈それ五十七年に過ぎんやである、刻々みな正月であり、事々みな元旦である、そして又同時に徹々みな歳末終美である。  
 ▼此意味に於て本當に正月が祝はれる人間になるといふ事が、人間としての凡てである。

(冠子)

目次

◆お正月 土屋觀道

◆宗教人生 土屋觀道

◆深心に就て反省(四) 土屋觀道

◆懺悔録(三) 演阿彌

◆宗教座談(三) 藤井貞邦記

◆吾朋便り

私どもが如來さまを信せられたとか、信せられぬとか、信せられたからとて威張るのも間違ひなら、信せられぬからと云て嘆くのも當らぬ。  
 私どもも信せられたと思ふのも、信せられぬと思はさるゝ救はれて上での安見轉想に過ぎぬ。救はれてゐたと思はれても上での安見轉想に過ぎぬ。救はれてゐたと思はれた居ると思はれて居るは實に救はれた事實がある。救はれた居ると思はれて居るは實に救はれた事實がある。  
 我々の小見偏智を以て佛を量てはならぬ。色々の境遇に置かれたの既佛の仕業である。これを想ふとき我々は佛の力を措いて何一つも出来ぬ。悉くを與へられてみ心のままにして行くより外は、一切未生以前の大家父がみ佛にて在ます。  
 我々がある死だと思ふのもそれが本當の死だやら、不死だやら或は居る新しいものを始めたりや、知り盡せない。我々が喜んだり居るやうと悲しんで居るやうと、それが本當の喜びだか悲しみだか判らぬ。我々は自分の都合上喜んだり悲しんだりしてゐるに過ぎぬ。喜ぶ悲しむ自分勝手だがそれ因て佛を怨んだり佛を讃めたりする事は佛を輕視するものであり、佛を自分と同じ程度に眺めて佛を玩具にしてゐる愚と不尊を重ねてゐるのである。佛は我々の思量以上の遙か大なるものである。否や大とも小とも名の附けやうの無い程の存在である。  
 我々はいつも自分の自己見で此不思量底の一大實相を邊に墮ちて泣いたり喚めたり大騒ぎをやつてゐる。自分やつてゐる。(冠)

## 宗 教 と 人 生

土 屋 觀 道

眞實の宗教は、人をして眞に生かしむるものはありません。私共は心から永遠に死にたくないもので、然に眞實の宗教に入らずして永生の道がありません。永劫に死にたく無い人は、先づ宗教に入つて此の道に生くべきであります。其の証據には眞に宗教に入つた人々が其命終の時に臨んで如何に喜びの中にあるかを見るがよい。所謂肉身の一生は之亦自然の法として終るべき時が来るのであります。眞實の生命はそれらを超越して遠く永生の光りに生くるのであります。人は一生の一生にあらずして永遠の中の一生涯であることが明になりますとき、そこには謂知れぬ無限の喜びと望みとが心の底に輝き渡ることを覺えます。

而もそればかりではありません。人は眞實の宗教に入つて、初めて永生の自覺を得るものであります。而も永劫に亡びざるのみならず、此の亡びざる自己をして、眞に意義ある事業に自らを立たしめ、遂に眞人の生活として自己の尊嚴を自重するに至るものです。

従て今までの單なる肉慾の一生は忽ち一變して最高理想の實現の爲めに最も大切なる自己の肉体であることを自覺するに至ります。従て今までは此の肉体は有限なものである、五尺の体軀は頼むに足らぬものかの如くにさへ思へてゐましたものが今度は最も尊むべき理想實現の身心として我身を充分に尊重す

るに至るものです。従てそれ位でありますから、もとより此の身を徒らに遊ばして又と歸らぬ自己の生命を徒費するやうなこともないやうになるのであります。遊ぶ爲めの人生でなくして働く爲めの人生であつたことを知るに至るので、自ら人は眞面目となり何事に對しても懈怠の心もないこととして、いつも勇みに勇んだ精進の生活に一生を樂しみむことになるものです。又私共の心が一度如來の大悲を信するからは何事も如來の聖旨に叶ふ可く自己の本心が如來の聖旨に動くのでありますから、そこには自から天地自然の大道に叶ふて來るのであります。従て自ら身体にも無理なくて、身心共に自ら健全となり病氣といふものも天地自然に一致する所自から無くなる道理であります。重い病も軽く軽い病は自から全快するのが當然です。従て眞の念佛の信者には求めずして自ら此の利益をも得るのであります。

又眞實の信仰にある人は一家も富むことになるのであります。何となれば身心共に天地の大道に一致して一切を考へ一切を行ふことになるのでありますから、何事によらず、其の事が自然と天地の道理に叶い、すべての事業も自ら順調になつて行くのであります。故に眞に此の世で自己の事業に成巧をしやうと欲せんものは先づ何よりも此の信仰に生きるといふことが先決です。或る人々は信仰に入るとウツも云はれぬやうになり、カケ引きもできぬやうになるので眞の活動もできないから宗教に入つては眞の成功はできないかと思つてゐる人もありますが、凡そ世の中に之ほど大きな誤まりはありません。何となれば眞實の成功は決してウツを言ふことや單なるカケ引きで成功するのではありません。それは反つてそれだけ其の人の人格を毀損するものであつて其の實をそれだけ其の人の大業を破る基いであります。凡そ誰人かあの人はウツが甘いからあの人が賣へ、あの人はカケ引きが上手だからあの人が賣れといふものがあります。従て夫れば其の人が未だ人からそれだけのウツッキであるといふことを知られない間の事でありまして、決して道ならぬカケヒキやウツ八百で永遠信の用を撻ら得るものではありませ

ん。之に反して眞に信仰ある人々は其の初めから一つの失敗も決してあるべきではありません。よしんば少々の失敗があるとしてもそれ位いの事業の失敗で落膽することもないので、自ら落つて居り、かといつて決してのんきな心であるのでもありませんし、常に其の道については細大となく天下の大勢から私利私慾の心なくして公平に一切を研究して、而も日夜にその道に働いて行くのでありますから、何事にしましても全体の上から一切を見て行く爲め、たまく一つの失敗も反つて成功の基となつて行くのであります。従て萬事が常に積極的に活動するといふことになつて行くので、決して失敗を再び重ぬるやうなことがないのであります。それにつけても心からよいものを安く一般に多く廣くとやつて行くのでありますから、自らそれに對する世間の信用も廣がつて其の結果としては自ら其の家も榮えるといふことは又當然の道行きであります。

加之、更らに信仰の人々は何につけかにつけいつも如來の大悲の中に安住して働くことでありますから、一家も自ら平和となり、一國も自ら發展し其の道の行はる、所、一として眞に文化の展開せない所とならないのであります。

然に世人がかゝる宗教の眞義をも知らずして、徒らに死人の宗教とか或は老人の死後の慰めにしやうとするのは其の誤りも又甚しいと云はねばなりません。それについて天を信した孔子の生活、神を信じたキリストの態度、さては佛教を開いた釋迦の一生を觀て見ることで、如何に之等の人々が大きな理想に生きられた事とせう。其他古來から大なる偉業をなした人々、若は永く其の家の榮えた一家を調ふる時、其の家は必ず代々何等かの嵩き宗教を信俸してゐた家だといふことを殆んど見出さぬものとはありません。

之を要する如何に眞實の宗教が其の人生に偉大なる影響を及ぼすものかはたゞ之を以つても實に計り知るべきであります。(二三、一二、二二)

## 深心に就ての反省

(四)

### 四、信機より信法へ

土屋觀道

斯くの如く云へば人は反對して言ふかも知れぬ「凡そ淨土教の本質は如何なる罪深かき人々も、又何なる愚かなる人々も一切悉くそのまゝに救済するといふにある。然るに君の如く或は至誠心の反省には吾人に果して向上の心ありや、此の心なくしては往生は不可なりといひ、深心の條に至りては深く信するの心ありや此の心なきものは往生を得ずと云ふ。而も信機を説くに至つては更らに罪惡生死の實觀ありや此の心なきものは往生を得ずと、乍然君よ凡そ世に汝の言ふが如き自ら向上の心を有し、或は深く自らの罪惡、若は生死の悲しみに自ら目醒めたるものならば何ぞ念佛の要あらん、それは已にそれたるにても立派なるの人ならずや、今彌陀の本願は寧ろかゝる向上の心もなく、又自ら罪惡生死の凡夫たることも氣付かぬほどのあさましき衆生をこそ哀はれと思召して立て給ふ本願ではないか、然に汝の言ふが如くんば恐らくは今までの信者と雖も反て自らの向上の心なきに驚き、或は自らの罪惡生死の觀無きに悲しんで如來の大悲に入ることの或は不可かと迷ふであらう。されば今日の彌陀法を説くものは決して人の罪惡を責むべきにあらず、寧ろそれらの總てを許して而かもかゝる衆生をこそ如來は救ふところ説くべきである。」と。乍然靜に思へば斯の如きの忠告は未だ一を知つて二を知らない人々の單なる論難に過ぎないので。若し難者の言が如くは何を以てか經には彼の國に生せんもの正に三心を具すべしと説かれたであらう。而し又何を以てか善導は三心の中一心も欠ぎぬれば往生不可なりと戒め給ひ宗祖法

然は何を以てか三心必具の念佛をわざ／＼述べられた事せう。これ恐くは未だ難者が聖教の眞意を知らず、又正に私の言はんとする本心の叫びを知らない所から、かゝる卑俗の淺見に墮せられたるの言葉ではないか。吾人は讀者と共に更らに一層の深き反省を自らの心にも致すべきではないかと思ふ。

尤もものは見やうであつて、聖經の中にも論者の言ふが如き意味の方面も確にある。そして亦之を法然上人の法語に見るも善惡を問はずして一切は只念佛によるべきよしを勧められ、如來の大悲はひとへに我等如きあさましき凡夫の爲めにこそ誓ひ玉へる願なれば自らの罪を恐れず如來にこそすがれといふ風に説かれてある部分もある。又之を親鸞上人の法語に見れば更らに一層に此の心ばへが明に説かれてあるところもある。乍然これは如何なる場合に如何なる人に説かれたるの法語であるか、それは主として道を求めて行きつまつた人々、即ち己に自らの罪惡に悲しみ、己に自らの解説生死の方途になやみ自ら如何とも仕がたい所の人々に對しての言葉であつて、今時の人の如く、未だ道さへも求める心もなく、況んや自らの罪惡も感せず殊に生死の問題など心にもおかないやうな自墮落の人々に對してまでかゝる説法をせられた所のものではない、況んや自ら己に一かどの信者かの如く自らもあやまり、人をも誤まらしめ而も何等の道にも入らず、悠悠然として念佛を誤まるの輩あり、或は自ら善人かの如くに思ひなして反つて眞人の行動を防ぎ、人を惡口して眞道を塞ぐの魔道さへ行はるゝ今日、若しそのまゝでよいならば何の必要あつてか佛道を説くの必要がありません。宗教は私共に慰安を與へるものではあるが誤まれる不實の慰安を與ゆべきものでない。ましてその爲めに反て其の人の正道を誤り、永く生死の輪回に墮し、又人をして益々天地の大道を犯さしむるの行動の如きは眞に道を思ふものゝ之を默

視してよいのであらうか。而て人は向上の心あり乍ら其の智慧たらずして迷路に迷ふことがないとも限らず、たゞよき人の説と信じ誤つて反て佛道の中心をさへ失ふ人々が往々にしてある限り、如來の大悲に自ら目醒め、少でも眞實如來の大道を叫ばんとするものは此の眞實の大道に一切を入らしむべく、各自の信仰を反省せしむると云ふことは、決して道を愛し、人を愛するもの、黙し難い所のものではありますまいか。或る人はこのまゝが救ひでないかと云ふ人があるかも知れぬ。乍然此の「このまゝ」といふ意味が所謂大自然のまゝといふのであつて、而も私共が此の大自然のまゝに於て一切が向上の一路であり、それが求道の一端であつて、やがてまた如來に南無する信仰ともなり、自ら佛としての生活にも入るの過程だとして而も斯の道を説くこと聽くことのそれまでも一切を是認しての上のこのまゝならばそれでよいが。乍然所謂佛敎で云ふ所の自然外道に陥つたやうなこのまゝ主義では何もかも無茶苦茶の生活このまゝになりおうせはせぬか、若し然らずは何を以つてか釋迦は此の世に出現し玉い、又何を以つてかわざ／＼説法するの必要があつたらう。人はともすれば自分の考へを中心として一切を定めやうとするの傾きがある、従つて自己を本位として一切を計るとき自分が誤まつてゐる時は又一切を誤るのである。だからして「このまゝ」といふことも若しも自分が誤まつてゐる時はこのまゝは又一切を誤まつたこのまゝになるのであらう。従つて自己の修養あさければやがて又人を見ることが淺いと共に、人を誤まることも亦多いのであります。然るを如來の大悲をのみ吹き立て、自己の行動を反省することが無い人はともすれば佛の本願に安んじて、眞實向上の一路も聞かず、このまゝ救いの惡無果の邪見に墮して自らも誤り人をも誤まるの罪に落つることが多いのであります。

而も此の至誠心を説くことは多くの人々が眞實の佛教も知らず、又眞實の自己をも知らずして、徒に之を娯樂の道具にしてゐるのを反省して、更に眞實向上の如來の大道に轉向せんことを願ふが故でありまして、決して其の人々をして自己の向上心なきことに驚いて其の佛道までも捨てしめやうとするが爲めではないのであります。否、それ位なことで自己の向上心までも捨て佛道までも捨てるやうならば、それは初めから未だ眞實の佛心もなく、又眞の向上の心もなかつた人でありまして、そんな位な信仰であつたならばそれは寧ろ早く捨て去つた方がよいものであり、又眞に捨つべきものであつて、反てその方が眞の信仰に入るの道でもあつたのであります。而して凡そ人たるもの誰として眞に佛性のないものではないのでありますから、若も自ら此の法を眞に聞くならば一人として向上の自覺に入らぬものではないのであつて、決して向上の一心を失ふなどのことはないものだと思ひます。否、私の考へでは寧ろかゝる眞實の佛心から出て來る所の至誠心の反省にあつてこそ、一層吾人の向上の一路も開け來り、念佛の直道にも進展し來るものと信するのであります。尙深心中、殊に信機の反省は所謂此の世の罪惡觀と無情觀との徹底でありまして、此の徹底あるが故に初めて眞に信法への轉回も開けて來るのでありまして寧ろ此の信機の徹底こそ實に信法に轉ずるの一大中心であるのであります。凡そ世間の人々が何が故に眞劍念佛の一行にならないかといへば恐くは十中の八九、主として此の信機の反省に欠けてゐるからではないかと思ひます。從て人はともすれば只だ法を聞くことのみによつて信を得らるるものと思つたり、或は又自己の罪惡や生死の話を聞くと又かといつたつもりになつて、もうそんな話は判つてゐる位に自誇れて、如來がどうの、眞如がどうの一念がああ、多念がかうのとふざけるを喜び、或はア

ラヤ識がどうの、マナ識がかうのと直に學解の人々とならうとするのであります。乍然斯かゝる人々は智慧を磨いて悟りを得べくんば源空いかでか聖道門を捨て、淨土門に趣くべしやの宗祖の法悟を何と解してゐるのでありませう。殊に甚しきに至つては未だ如來の大悲も信せず、口稱一行の念佛にもなりかねて、心ひそかに自己の本心に惱める所があり乍ら、自ら得たるの顔つきはそれでも眞實の信者であらうか。而もかゝる人々に限つて、自らの信仰のみまことかの如くに誇り、人にも得々として之を語つて耻ざる人々である。而も其の人の行動は何であらうか徒に自らの信仰を誇つて反て他人の信仰をぞねんでゐる。そしてともすれば自己の體驗を語ることができないうで反て低級なる人々の幻影のみ語る。それも自分勝手のよいやうな文証のみの話を以つて如何にも堂々たる信者かの如くに裝ふ。かくて自らを誤り又人をも誤まるの行爲となる之私共の最も恐る可きことでありまして、私が茲に極力三心反省の叫びをいたす所以であります。

而も自分の機根のつたなきが判明するといふことが如來を離れるの理由とは寸毫もならないのです、否、寧ろかゝるあさましき吾々であるかと云ふことが反省せらるればせられるほど私共の向上心は如來を離れることができないのでありまして、一層信法への轉向ともなり、從てまた今まで知らずにやつたあさましき私共の行動も幾分かつゞはその人にできる力のかぎりを以て益々善道に進むといふことともなるのであります。

現に法然上人の聖淨二門の教判の如き、厭離穢土欣求淨土の安心の如き、悉く之信機の反影でないものはありません。願くは我が親愛なる法の友人よ、かゝるあさましき人々の言葉には夢にも耳なかし給ふことなかれ、これはこれ實に千古の迷妄であります。(一一、三〇)。

# 懺悔録 (廿六)

演 阿 彌

私の本當の御父様なる絶大な如來様よ。トマヌアケンピスに刺激せられて生みの惱みに苦しめられつゝあつた私は更に又西田天香さんの「懺悔の生活」にすつかり引付けられて仕舞ました。「眞實に凡てを捨てた生活!。其生活の中にこそ本當に氣樂な而して眞劍な遊戯三昧(遊戯三昧と呼ぶ其思想上の中心點は全く是認し難いけれども)が味はれる事であらう。さうだ。凡て無所有なる心境にのみ全く解放せられた涅槃の淨土があり得る筈である。然るに私が今菩提の覺路を辿らんとして寸時も忘るゝ事なく自分に死ぬ可く悶えに悶え惱みに惱みつゝあるに拘らず然も一方に於て自分を望み自分の所有物を豊富にせんと(精神的にも物質的にも)して居る事は全く矛盾した行爲である。さうだ。私は誤まつて居たのだ。噫々私は全く誤つて居たのだ。捨てやう。捨てやう。一切を捨てやう。妻も子も家も財産も!。然し乍ら老ひ

る道があり相にも見えない」。私は眞劍でありました。而して自分の一生に於ける一大轉機としてすつかり考へ込んで仕舞ました。四五日讀了す可き一冊の本が二ヶ月余りも懸つて讀んでは泣き閉ぢては瞑目して一時は全く寺も捨て家族も捨てて一燈園へ行つて仕舞ふと決心した位でした。毎日日本を讀んでは泣かない日とはありません併し乍らまだ此本には其半身の假所有生活たる宣光社の事が顯はされて居ないので「無所有者に即する假所有が什麼状態に西田さんに体现せられてあるだらうか此問題を見極めてから後に一燈園に行つても遅くはない。幸ひ光と云ふ雑誌も出て居る事だからかう云ふものなぞで今少し研究して見やう」。かう思つて毎月の雑誌を讀んで行くといろ不備の點が見えて來ました。謂ふ所の自他一体觀と云ふ感じ方の極愛一子地と云ふ菩薩の心境とは余程相違して居る事やまた無所有と云つても無所有を意識して居る處に完全に所有から超越して居ない事及び一度捨て去つた者を再び拾ひ上げて行く性慾なぞの問題や精神主義を標榜し乍ら何

たる母丈には何だか濟まない様な氣がする。八十に近い母に歎きを與へると云ふ事はよし夫が非眞理的であつても子として全く堪え得られるものではない。併し釋尊は一切を捨て山に這入られた。古への多くの聖者方は大概同じ轍を踏まれて居る。東洋と云はず西洋と云はず大概の聖者方は皆な一切を捨てられた。捨てること云ふ事は唯だ思ひ切つた決心一つ丈だから夫れ丈の事なら自分にも出來さうに思へる。然し乍ら一切を捨て、一燈園に行つた其後の心境が果して解脱の世界不滅の世界價値の世界を將來するであらうか。之は余程考慮を要する事だと思ふ。若し眞實の解脱もなく眞實の價値生活が實現せられずして唯だ母の歎き家族の恨みのみを齎たらすならば爲しても益のない事である。凡てに無理がなく凡てが圓滿に行かれる道がありはしないだらうか。西田さんは此道こそ無理のない唯一の許された道だと云ふけれど何だか一分の無理がある様にも思はれる。而して現實生活の圏外へ逃げ出した生活の様にも思はれる。さうかと云つて今の處此道以外に全く満足を感じ得

となく形式偏重の傾向がほの見えて居る事や其宇宙觀が實相觀的であつて縁起觀的でない事や其他色々の細い心理反省が缺けて居る處が見えて來たので西田さんに對しては萬腔の同情と尊敬とを持し乍ら段々一燈園同人となる氣がなくなつて來ました。けれども「懺悔の生活」を二ヶ月も懸つて讀み其後毎月「光」を讀んで行く内に種々な修養を然もかなり深刻にさせて頂いたので頗る鈍感の恨みはありましたが本當に私に取つて大なる恩寵であつた事を喜ばずには居られませんか。謂ふ所の「凡てにあやまる」と云ふ事なんかも中々判らなかつた心持でありました。凡てにあやまると云つたとて凡てに對する自己の罪惡を感情的に痛切に意識せずしてどうして「あやまる」氣か起きませうか。そんな事は唯だ物々相關てふ論理的概念か若しくは自らを僞つた一種の誇大的表現に過ぎないと思はれてなりませんでした。然しそれから半年も過ぎた或る朝の事であります。或る人を訪問しました時其人が死後の虚無なる可き事に牢固たる偏執を持つて居つて日常を價値的生活に改善せ

んとする私の信念に共鳴して呉れません。三時間  
 斗り口を酸っぱくして説いたけれど中々靈性のひら  
 めきさへも見せて呉れません。一方に用事をひか  
 へて居つたのでさうさう長く居る譯にも行きませ  
 んので空しく其處を辭して今度は約一里半斗りあ  
 る處へ田舎道を獨り考へに沈み乍らとぼとぼと行  
 つたのであります。分けても美しい駿河灣の大自然  
 然に接し乍ら而して雲のあなた、澄み切つた空の  
 一角に目を放ち乍ら信仰の思惟に悩む事は苦しい  
 中にまた一種云ふ可らざる悠久の感を感じる者で  
 あります。所用をすまして再び同じ道を引返へし  
 ました。僅か斗り來ると土堤の蔭に三人の子供が  
 性的悪戯をして居るのが目にとまりました。一人  
 は知らないけれどもああ云ふ悪戯がやつぱり無意  
 識的に傳々相承して居るのだ。展開された美しい  
 大自然も、秘せられた醜い人間の悪戯も共に大法  
 身たる如來様の所作する處であらうか。嗚呼悠々  
 たる自然よ。あなたは余りに外見斗りを美しく仕  
 過ぎて居ます。否な自然はかくの如く美しいのに  
 私達人間のみはなせかう醜いのでせうか。ああ如

來様よ。あなたはあく迄も美して尊いものになせ私  
 達人間はかくの如く醜いのでせうか」。私は我知  
 らず涙を流して居るのであります。何だか獨り  
 愁しく涙の出るのさへ半意識的であります。此時  
 です。不圖「私達人間のみが悪いのだ。イヤ人事  
 ではない。此の私が悪いのだ。私に知られたる世  
 界も私に知られてない世界も皆んな皆んな私の悪  
 い爲めに悪い部分が殘され存在されて居るのだ。  
 あゝ濟まない。やつぱり私の罪なのだ。私が完く  
 清まり而して私を聞き私を見私を知る事に依つて  
 私の周圍が少しづつなりとも清まつて呉れる様な  
 さう云ふ大きな力が私に與へられてないと云ふの  
 は全く私が悪いからなのだ。全く私の足らない罪  
 なのだ。さうだ。私は凡てにあやまらねばならな  
 い。凡てにあやまらねば凡てに對して全く申譯が  
 ない。お、如來様よ。おう十方目前の御父様よ。  
 おうなつかしい如來様よ。私が悪いのです。私が  
 悪いのです」。暫く茫然として大きな自然の中に  
 同化して仕舞つた様な感じでありました。西田さ  
 んの云つたあやまると云ふ心持も全くかう云つた

氣分なのかも知れません。本當に人を批判すると  
 云ふ事は難い事であります。自分の經驗範圍に丈  
 しか解せられないのですから自分が低級だと其理  
 解も全く反對に誤られて仕舞ふ事もあり勝です。  
 私も此經驗が無かつたら西田さんの此氣持を理解  
 し得なかつたかも知れません。併し私達は此懺悔  
 生活丈で終る可き者でなく更に更に積極的な價値  
 の問題を深めに深め高めに高めて行かねばならぬ  
 と念願して居る者であります。此故に多大な同情  
 を持ち乍らどうしても其仲間になる事が出来ませ  
 んでした。夫でもああ云つた體驗的な事は人を引  
 付ける大きな力がある者ですから一度は當地へも  
 来て頂いて余りに金權主義的な多數の人達に一滴  
 の清涼劑を與へ而して眞實なる信仰への導火線と  
 もなる様に望んだのであります。此故に或機會を  
 得たので親しく御目にかゝり而して此御願もした  
 り又御話も色々承りましたか御遇ひして見ると何  
 だか淋しい人の様に直觀せられて心からなつて  
 行、事が出来ませんでした。此私の頭は西田さん  
 の御都合で遂に其機會を逸して仕舞ましたがう

云つた色々な事がどの位私を長養せしめたか判り  
 ません。取り分け大きなものは所有に關する考方  
 であります。以前には私の所有物は何處迄も私の  
 所有であつて事實無所有とも假所有とも感ずる事  
 は出来なかつたのでありましたが此大きな悩みを  
 越してからは全く如來様よりの預り物であり天地  
 の假所有物である事及び夫は實に神聖と正義と  
 の御旨を顯はすべき資料で私が我物として御用  
 す可き物でない事を衷心から思ふ様になつた事  
 であります。無論完全であり得ない私は少からず之  
 を漫りにし之を亂用して居ります事を耻かしく思  
 つて居りますが然し乍ら其金錢に對する最も重大  
 な中心點が全く變つて來て居る事を日常の中に自  
 覺しつゝあるのであります。家族に禦射せられ周  
 圍に影響せられて後悔を繰返す事も多くあります  
 が兎にも角にも其中心點の變化は一に此事があつ  
 てからで事實金錢に對する執着が全く淡泊になつ  
 て來た事を衷心から嬉しく思つて居ります。かく  
 の如く西田さんは私に取つて全く大きな善知識の  
 一人であつたのであります。(續く)



## 宗教座談 (三)

藤井貞邦記

上「ほんとうに同情の極みであります。想へば私も丁度そのやうな時代がありました。何一つ自分の力で出来るものはなし、一切が悉く不可解ですし、全く絶滅でもしてしまへばとさへ思つた事がありました。一面から見れば一切が運命でせう。どうした所であるやうにしかならないやうな気がしますもの、乍然かといつて何事もせないで運命にのみ任せざることもできませんわねやつぱり寂しい中からも出来る丈けの躍進もして見たい氣もしますわね。でもどう躍進するのですか。本心に満足の出来ない事は皆悪でせう。一切が全一となつて満足するものでなくば本心は満足しませぬ。しかしどういふ事をしたら一切が満足するかは徹しない人々にはたゞ想像して見る外ありません。従つてそれは單なる想像であつて、眞實自分の体験ではありせまん。だからそれよりも私は自分が

よいと信する事をする方が一番確かだと思ひます。之は吾々が生れながらにして持て居る本心の要求だからです。而も私共は自他共に總て宇宙の現はれであるからです。そこで自分達は何事にも天地に對し耻かしかる處まで徹底せねばならぬのです。しかし多くの人々は其處までではなく行けないのでグラ／＼します。そこに徹するのが宗教です。畢竟宗教は自己と絶對との關係です。私利私欲は勿論自己を亡すものですが自己を維持することを偏に私欲だとばかり思つてはいけません。之が公欲にもなるのです。今年(十三年)の眞生一月號を見て下さい。そこには公私一如の生活を書いております。自己の失敗は總ての人の失敗です。兩方から噛み合はんとして居たものが實は一つものであつたと判つたなら一切の争いは要りません。さういふ世界が見えて來たのが信仰の世界です。しかし理窟を覺えた丈ではいけません。退却も背進ならよいのです。第一この身体を私と思ふから自分はどうなつてもよい等と考へますがそれは間違ひです。之は宇宙の現はれなので

す。

長「念佛は無條件で唱ふべきで豫期を持つてはいけないと思ひます。

「只念佛して彌陀に助けられまゐらすべし」といふ語の壯嚴味を感じました。只今こそは眞に念佛が唱へられました。そこには念佛しての文字は念佛することによつてとか念佛することの代償としてとかいふそんな心はありませんでした。又同時に念佛に自力だの他力だのといふ差別の意味もないのです。

上「ほんとうに念佛する人の心はそのどうりだと思ひます。私もそれには全々同感です。そしてかうして念佛する所に眞に又心からなる眞人の生活も一層あらわれて來るのだと思ひます。けれどもそれは念佛する人の心もちであります。如來大悲の本願は念佛することによつて自づと如來の懷に一切の衆生が歸することのできるのを見援いで立て給ふた本願の念佛ではなかつたか。もとより南無する心と稱名とが二つではない。南無の恣が稱名であり、稱名の心が南無の當体であるので

す。而もそこには果分不可説の妙境であつて自力他力の觀念も無いのです。乍然それのみを以て一切の衆生を律することは考へねばなりません。世には初めからかうした信境にのみ住して心安かに念佛のできる人ばかりでなく、又同じ人でも今のやうな心境ばかりの時も無いのですから。そこには各々其の機を異にするために未だそこまで來つて居らぬ人も多さんにあることを信じます。従つてそこには現在に於て限りなき自己の罪惡に悲しみ、或は現に臨終の間ぎはに於て生死解脱のできない苦しみ立つ人もありませうし、或は自己の力なくして貪瞋痴慢の心になやまされてゐるほどの人もありませう。而も私共がかかる惱みになやんで之を脱せんとして脱することのできない事實に接したとき、如來の大悲はそのままでよいのだと教へられても愚かなる私共には現に苦い時にはそのまゝでは居られないのが當然ではないでせうか。そこに如來の大悲と私共の心とは計り知ることのできない隔りがある。茲に於てか如來の大悲は更らに一步を先方より進めさせられて、私共を

此の苦しみの中から救い出すべき方便がなければならぬではないか、そして又私共の本心の要求もそのまゝではゐることができない限り此の痛しき心の苦難を免かるべく何等かの方法に出やうとするのが自然でありませう。而も其の自然の力は私共自身の力で此の苦難を勝つるの方法が立たない時、此の自力の外に此の苦難を逸るべき方法はないか、そこに所謂他力を求めんとする心が起り而て此の心に應ずる救いが如來大悲の本願であり、又此の救いに入らんとするのが私共の如く苦難に堪えない人々の最後に歸する念佛ではないか。『汝一心専念にして來れ、我必ず汝を救はん』此の聲を聞くものは此の聲に往く、其の姿が即ち南無阿彌陀佛であります。而も私共の苦海より脱したいとの要求は如來の本願をきくに至つて其のまゝ、欣求淨土の心と變し、欣求の心は眞に救いのミオヤ親にすぎらざる念佛の心、それが其のまゝ、如來大悲の本願より顯はれた念佛であつたのであります。悲しきもの、勞れたるもの、すぎらる心さへ己につきて、すべてを如何とも杜がたいものはやつ

ぱりすがらすとも其のまゝで如來に任かすればよいのです。

乍然私共の限りなき眞實向上の自己の本心は如來の大悲につままれて、やがてまた如來に等しき神人の生活をも望むに至るのです。そこには苦海を厭ふて淨土を願ふ心が起り、而も苦海を脱するの方法として如來にすがらんとするの私共の心は、又自ら大悲本願の念佛と一致するのであります。斯くの如く感じて斯くの如くに念すれば如來大悲の本願は正に『我名を呼べ』我名を稱へて我にすがれ』とのところまで來るのではありますまいか。而て又私共の本心の要求も止め止めんとして止むることのできない三毒の心に自ら悲しみ、自ら此の苦を脱せんとして脱し能はない無力のはてには止め止めんとして止むことのできない私共の本心はやがて如來大悲の本願の御名を通して如來の淨土に往くべくすがるといふことは之また自然の念佛でありませう。而も此のまゝ、が柳は緑りに花は紅いなる姿でありませう。自然の風光はかくて人生の眞義を顯はし、そこに人類のまたなき

### □吾朋便り

□北 越 原吉郎様

向上の一路も展げてゐるのでありませう。そこには永生の光り輝き無限の望みと喜びと力との生活も初めて開けて來るのであります。念佛成佛は眞宗、眞實の念佛は之また自然の念佛であります。努力をせない稱名のみが自然でなく、夜晝努力して申す念佛も見やうによつては反つて自然の念佛であります。乍然あなたの申される『只念佛して』といふ念佛が念佛する時の心の上に念佛することによつてとか念佛することの代償としてとかの觀念が働いていないことは私も全々あなたと同感であります。そして又從來の淨土宗の稱名爲本の念佛もやつぱり此の心と異つたものではなかつたのです。如來は南無する一念が念々に相續しては常念の念佛となり、或は一生を貫いて如來を離れぬ人生の一生が即ち念佛の生活であつたのであります。乍然御名を呼べ我名を稱よとの如來の本願は味へば味ふはご、申せば申すほど限りなき如來の大悲とこそ仰がれてなりませんすね。

(つゞく)

久々にて拜姿するを得まして眞に嬉しく存じました。此度の御別時は私の信仰上確に第二期の革新期でありました。近來甚だ停滯鬱屈の状にありし私の信仰も今回御蔭を以て見事に之を打破し勇猛に精進するを得て實に歡喜に堪えませぬ。御教導により當地一般の人々も眞に念佛の意義を了解し何れも元氣に充ち満ちて大喜びであります。即ち左記數條は今回御別時に依る收穫であります。

- 一、當地の信者一同老若男女を問はず等しく念佛し積極的意義を了解して元氣に満ち充ち本當に活き々々しました事は昨夜も眞光寺に於ける集りにも能く現はれて居りました。
- 二、光明會員の結束を一層鞏固ならしめたる事
- 三、未信の者をして念佛唱名は全く人生に於ける最も必要にして一切活動の源泉なる(意義あり價值ある活動の)所以を明了ならしめたる事
- 四、青年側の大なる刺撃を與へ精神的大革命を興

起せしめたる事

ります。

五、忽にして青年今井氏の如き熱口東京觀道

烈なる信者を出し延いて拙家一同何事でも慈光裡中に之を行くこと  
の者も擧つて念佛を唱へ喜び勇んが眞生の道であります。皆様も此  
で信仰談を聴聞し日常生活の上の心して一切を無限の中に御進み  
愉快に活動する様になりし事下さい。よしんば不信との友と雖  
六、隨て當地方一般社會に對し不も一切は我が友。我兄弟であると  
少、好影響を興へつゝある事思へば此の心して共に眞生の道に  
等であります。乃至。

尚三月頃の巡錫を御待ち申し居口前月號は休刊。誌代は順送り。

寄贈並ニ誌代拂込芳名

寄贈の部  
○金拾圓唐澤阿彌陀寺様、○金五圓黒宮白石様全原吉郎様全渡邊八右工門様○金參圓熊野宗純様全上田顯光様○金壹圓五十錢竹村清音様○金壹圓横井由之助様  
誌代の部  
○金參圓笹本戒淨様全長岡市法藏寺様○金貳圓山口祐助様全岐阜林香寺様○金壹圓五拾錢寺澤林三○金壹圓拾錢中野治榮様○金壹圓川添誦信様全藤井福治様全横井由之助様全川波源四郎様全山田八郎様全山崎ヒサ様全大慈稱まき様全金子もと様全中村なか様全伊汁源兵衛様全熊澤國式様○金拾壹錢淺野崇様  
ニニニ

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

發行所 眞生社

編輯兼 眞生社

發行所 眞生社

印刷所 眞生社

東京市芝區三田四國町二番地三號

東京市芝區三田四國町二番地三號

謹賀新年

全國光明會有志一同

全眞生社同人一同

時節柄賀狀の交換を差控へます。

念佛三昧會 實相寺

一月八日ヨリ七日間  
清水市清水町實相寺。

東海道江尻驛ヨリ南

一、師 土屋觀道上人

眞劍にて而もしつくり落着いて望みど喜と力を味いたいものです。